

『新生』から『夜明け前』へ (3)

De “Shinsei” à “Yoakemahe”

— sur les oeuvres de SHIMAZAKI Touson —

佐々木 涇
SASAKI Thoru

Ⅱ-1-(1)

『新生』は先に述べたように『朝日新聞』に大正7年(1918)5月1日から同年10月15日まで、135回の連載で第一巻が終了し、第二巻は翌8年4月27日から10月23日まで同紙に141回にわたって書き継がれた。単行本としては第一巻が大正8年8月に、第二巻が同年12月に春陽堂から出版された。第二巻では中扉に「『新生』は二巻よりなる」と記されている。また大正11年に出版された『藤村全集全12巻』の第十一巻にはすべてが収録されている。巻末には「第十一巻の『新生』は前後二篇よりなる」と記されている。

作品の成立事情から見ても、『新生』が「前後二篇より成る」とするのが自然である。主人公の本能が故に生じた失態による罪意識におののき、フランスへ逃げるかのようにして旅立ち、フランス滞在中で第一篇が終り、三年後に戻り、姪との関係を再び続け、別れてしまう経過が第二篇に描かれているから。だが注目したいのは『新生』の第一巻のみが『寢覺』と改題された点である。昭和10年(1935)に『夜明け前』が完成された後、新潮社から「定本藤村文庫」が出版され始めた。その第一篇と第二篇に書き終えたばかりの『夜明け前』が収録され、昭和13年(1938)6月22日発行の第七篇「道遠し」下巻にこの『新生』が収録された。だが前篇のみで『寢覺』と題され、その旨が記された付記がある。藤村が67歳のときである。ここにその一部を引用する。

「こんな悲哀と苦惱との書ともいふべきものを、今更讀者諸君におくるといふことすら氣がひける。しかし、これなしにはあの『嵐』にまで辿り着いた自分の道筋を明らかにすることも出来

ない。この作、もと二部より成るが、本来なら更に一部を書き足し全體を三部作ともして、結局この作の主人公が遠い旅から抱いて夾た心に歸つて行くまでを書いて見なければ、全局の見通しもつきかねるやうな作で、人生記録としてもまことに不十分なものではある。それに、これを書いた当時と二十年後の今日とでは、周囲の事情も異り、人も變り、さういふ自分の心の持ち方も改まつて來てゐる。そんなわけで、この文庫第七篇のためにはむしろ第一部を選び、作中の主人公が遠い旅に出るから歸國を思ふまでのくだりにとどめ、題も『寢覺』と改めた。

今日になつて見ると、これを書いた当時わたしは新生といふ言葉に拘泥し過ぎたことに氣づく。新生が新生であるといふのは、その達成せられないところにある。さう無造作に出来るものが新生でもない。その意味から言つても、今回改題の『寢覺』こそ、むしろこの作にふさはしい……(略)……

こゝに載せる『寢覺』は言はず部分であるが、しかしこれはこれとして、一つの作品とも考へられやうかと思ふ。猶、いろいろ書きつけて見たいことも多いが、こゝに盡せない。」(註1)

この他に『新生』が中国語に翻訳されたこと、父の姿の描き方が不十分であること、自己を反省するが故に黙してきたことなどが記されている。

さて、注目すべき点は、藤村が『新生』という作品を「『嵐』にまで辿り着いた自分の道を明らかに」するものとしている点であり、前篇を『寢覺』と題するのは、「これはこれとして、一つの作品と」作者自身が見なしている点である。つまり『新生』の前篇は完結した一つの小説世界であ

る。これを前提に前篇を考え、しかも『寢覺』という題として捉え直すとすれば、この作品にどのようなテーマが浮かび上がって来るか。前回までに叙述したように、藤村は自らの位置を見出し、確かめ得た点である。言わば、自己の存在場所の確保とも言うべきであろうか。フランスへ赴くことによって、自己の半生を見つめ直し、第一次世界大戦という状況下において社会との連関性を考える。そして人生における新たな歩みを開始する、そのための作品である。ならば後篇はどのように扱ったら良いのか。帰国後、姪との関係を精算するまでのほぼ三年間を語っているのだが、テーマは余り深められていない。芥川龍之助が不満とするのはその点であろう。以下にどんなテーマが浮かびあがってくるか述べていく。

Ⅱ-1-(2)

先ず『新生』の主人公、岸本の思いの変遷を辿っておく。繁雑になるが、より理解を深めるために引用が多くなってしまいが、承知されたい。

帰国を前にした岸本は「幾年となく鼻の下に蓄へて置いた」ひげを剃り落とした。

「曾て國の方で人を教へたこともある自分の姿のかはりに、ずっと以前の書生時代にでも歸つて行つたやうな自分の姿がそこへ顯れて來た。」

(註2)

ひげは、自らを偽るかのようなと言うより、心もとなさを隠し、見栄えをよくしていたものであったろう。そのひげを剃り落とすことは、節子のみならず、自らを知る人々全てに真の姿を見せる決意がそこにかがわれる。「書生時代」のような自分の姿をさらすのである。それまであったひげがないということは、頼りなさを示すことでもあり、自分自身にはひとつの決意の結果を常に意識せしめるという積極的な意味を込めることができる。だが未だ態度のみであり、行動として表すには確実さが伴ってはいない。例えば神戸に着いても、すぐに上京しようとはしない。神戸、大阪、京都にそれぞれ一泊し、一日でも遅く東京に着こうとしたのである。帰国前に決意した気持を容易に節子や兄夫婦らの前にひろげることにはできない

のである。品川に到着する時間も伝えずに降り立ったのである。

「彼は駐車場の出口のあたりを歩いて見た。靴のまゝ堅い土を踏みしめ踏みしめして見た。さうして荷物たてもものの受取れるのを待った。その乗降の客も少い建築物の前に立つて見て、今更のやうに彼は遠く旅して歸つて來たことを思つた。斯の寂しい入京は、おのづと頭の下るやうな自分の長旅の終りに適よさはしいとも思つた。」

(註3)

新たな思いで、帰国後の生活を始めるはずなのに、この有様である。無理もない。自らの犯した罪におののいて逃げ出し、一時はフランスで永住することさえも考え、再び戻るまいと決意したのだから。

こうした状態であるにしても、ともかくも岸本は留守宅を守っていた兄夫婦や子供達に迎えられた。むろん節子にも。

「祖母おばあさんの後方に立つ節子をも見た。彼は自分で自分の顔色の苦しく變るのを覺えた。」

(註4)

帰国の挨拶を交わしながらも、節子とは容易に話もできない。

「岸本は節子に近づくことを避けて居た。歸つて來てまだろくろく口を利かうともしなかつた。唯それとなく彼女の容ようす子を見ようとした。彼の眼に映る不幸な犠牲者は遠く離れて居て想像したほど變り果てた姿でも無かつたので、それには彼はやゝ安心した。」

(註5)

だが、やがて節子は沈みがちになる。岸本はその状態を「節ちゃんの低氣壓」と呼ぶが、その原因を知ることはできない。

「嫂も、祖母さんもまだ起出さない頃であった。節子一人だけがしよんぼり立働いて居た。『何時までそんな機嫌の悪い顔をして居るんだらう。』

さう思ひながら岸本は臺所から引返さうとした。口にも言へないやうな姪の様子は其時不

議な力で岸本を引きつけた。彼は殆んど衝動的に節子の側へ寄つて、物も言はずに小さな接吻を與へてしまった。すると彼が驚き狼狽して、節子の口を制へたほど、彼女は激しい啜泣の聲を立てようとした。」（註6）

これをきっかけにして、二人の関係は元に戻る。岸本は妻の墓参に節子を伴う。

「旅から歸つた叔父に随いて歩くやうなことは、節子に取つてそれが初めての時であつた。何時晴れるともなく彼女の低氣壓も晴れて行つた後で、あれほど岸本の心を刺戟した彼女の憂鬱が何處にその痕迹を留めて居るかと思はれるほど、その日は冴え冴えとした眼付をして居た。……（略）……斯うして一緒に連立つて外出して見ると流石に三年の間の節子の發達が岸本にもよく感じられた。彼女は狭苦しい籠の中から出て來て、實に幾年振りで、のびのびと夏の朝の空氣を呼吸する小鳥のやうであつた。家に燻ぶつて居る時とも違つて、その日の節子はつくり勝りのする彼女の性質や、目立たない程度で若い女が振舞ふやうな氣取りをさへ發揮した。」（註7）

沈んだ様子が見えなくなった節子のことを考えながら「與へるつもりも無い接吻をなぞを與へたことを悔いた」（註8）とは言え、そこには以前の岸本は姿はない。自らを見つめる姿がある。事態に手をこまねいて、おろおろする姿はない。「鏡りが戻つてしまった」事態を直視しながら、自問をする。

「お前はほんたうに人を憐んだことがあるか。もう一度夜明を待受けるやうにして旅から歸つて來たお前の心は全體の人の上に向つても、お前の直ぐ隣に居る人の上には向はないのか。お前の眼にはあの半分死んで居る人が見えないのか。その人を憐まないで、お前は誰を憐むのだ。」（註9）

そして節子を救うことが自らを救うことになるという認識に達しさえもする。さらに節子が自活できるような方法を考え、その結果、自分の仕事を手伝わせることにした。岸本は仕事場を借り受

け、そこに節子を通わせたのである。仕事を手伝う節子をじっと見つめる。

「何となく岸本の眼には以前の節子とは別の人がと思はれるほどの節子が見えて來た。學校を出てまだ間も無かつたやうな娘らしい人のかはりに、今はずつと姉さんらしい調子で物を言ふ人が居た。なんにも世の中のことを思ひ知らなかつたやうな人のかはりに、今はいろいろな悲しみを通つて來た人が居た。どうかすると岸本は兄や嫂なぞの認めもせず、また認めようもしないものを斯の節子に見つけることが出来るやうに思つて來た。三年前に比べると、それだけもう二人の位置が變つて來て居た。」（註10）

岸本は不用意にもらす。

「『節ちゃんは苦勞して、以前から比べるとずつと良くなつた。何だか俺はお前が好きに成つて來た——前には左様好きでもなかつたが。』」（註11）

こうした状態の中で新たな縁談話が岸本のためにもたらされた。岸本はあがく。

「岸本の頭腦の内はシーンとして來た。二度結ばれるやうに成つた節子との關係は彼自身の腑甲斐なさを思はせた。けれども彼は眼前にある事柄にのみ囚はれないで、進路を切開かねば成らないと思つた——節子のためにも、彼自身のためにも。」（註12）

だが、またしても「節ちゃんの低氣壓」である。二人だけの仕事場で再婚の意志を口にしながら、岸本は不意に口にする。

「『叔父と姪とは到底結婚の出來ないものかねえ。』

思はず岸本は斯様なことを言出した。彼は節子の顔を見守りながら更に言葉を繼いで、

『いつそお前を貰つちまふ譯には行かないものかなあ。どうせ俺は誰かを貰はなけりゃ成らない。』

『吾家のお父さんは彼様いふ思想の人ですか

らねえ。』と節子は答へた。

『節ちゃん、お前は叔父さんに一生を託する気はないかい——結婚こそ出来ないにしても。』

斯う岸本は言つて見て、我と我が口を衝いて出て来た言葉にすこし驚かされた。

『よく考へて見ませう。』

その返事を残して置いて節子は家の方へ歸つて行つた。」 (註13)

「『節ちゃん、昨日の話は奈可成つたかね。よく考へて見ると言つたお前の返事は。』

と岸本が訊いた。その時節子は持前の率直で、明かに承諾の意味を岸本に通はせた。

『お前は叔父さんを受け入れたね——』

『ええ。』

と節子は點頭うなづいて見せた。

岸本は節子の意中を訊いて見ようとしたに過ぎなかつたが、しかし彼女の『ええ』は何がなしに彼を悦ばせた。」 (註14)

むろんこの復活した関係は誰にも知られていない。兄や嫂、つまり節子の両親には気づかれていない。節子の心の状態は回復する。

「十一月を迎へるやうに成つて節子は眼に見えて違つて来た。三年も彼女の側に居て彼女のために心配しつゞけた祖母さんまでがそれを言ふほど違つて来た。彼女の動作から彼女の聲までも生々として来た。

『でも、ほんとに力を頂きましたねえ。』

節子は岸本の二階に夾て左様言つて悦んで見せるほどに成つた。

斯うした力は——それを貰つたと言つて見せる節子の方ばかりでなく、どうかして彼女を生かしたいと思ふ岸本の方にも強く働いて来た。ほんたうに人一人でも救ひたいと考へれば考へるほど、彼は節子の違つて来たのを自分の胸よろこびに浮べて、その生命いのちの動きから湧いて来る歡喜を自分の身に切に感ずるやうに成つた。のみならず、彼自身と姪との関係までも何となく變質したものと成つて行くのを感じて来た。」 (註15)

「變質したもの」とは何か。共に居ることによ

る心の落ち着きである。相思相愛なるが故に生じたものに他ならない。節子を含めた兄家族と別れて住むようになって一層明確になった。この時点で初めて岸本は節子に対する自らの気持を知る。

「憐む人と憐まるゝ人との隔りは、やがて彼と節子との隔りであつた。『節ちゃん、お前は何時までも叔父さんのものかい』と訊いて見るほど近く行つた時でも、まだ彼は自分と節子との間にいくらかの隔りを置いて居た。どうやら彼はその隔りまでも捨てゝ掛らうとするやうに成つた。まだ若い女のさかりの身で一生を託してもいいと言ふほど可憐な心を持つ人を救はうがためには、彼は何かも彼女に與へようとするほどの情熱を感じて来た。それほど節子の書いてよこした手紙は、彼を淋しがらせた。

斯うした眠りがたい夜が續いた。過ぐる三年、罪過の苦痛に悩まされつゞけた岸本のたましひはしきりに不幸な姪まことと呼んだ。その時になつて初めて彼は節子に対する自分の誠實を意識するやうに成つた。長い懊惱も、憂鬱も、忍耐も、寂しい寂しい異郷の獨り旅も、すべては皆この一つを感知するために有つたかのやうに思はれて来た。もつともつと斯の関係を押し進めて行つて見たいと思ふほど心もすゝんで来た。節子を谷中の方に置いて見て、一層よく岸本にはこのことが分つた。

五晩ばかりも岸本はよく眠らなかつた。彼には自分で自分が持ち切れなくなつて来た。到頭彼は節子に宛てゝ、嫂に讀んで聞かせても差支の無い手紙を書き、別に書いたものを同封した。その中に、彼は今迄節子に展げて見せたことおもひの無い自分の心胸を打明けた。」 (註16)

そして節子の返事の手紙である。

「わたしは心から微笑みました。幾年も笑つたことのない人になつて居りましたのに……何かもお話しますと申上げましたね。とうとうその時が参りましたよ。わたしはその時がこんなに早く参らうとは思ひませんでした。すくなくも二三年は待たなければ成らないかと思ひました……(略)……あの低氣壓の何であつたかは、

漸くお解かりでございませう。どうぞ長い間のこの心を、そして心からの微笑みを御受け下さい。」（註17）

岸本は人生と自らの心のありように驚く。

「彼は節子に対する自分の誠實を意識すればするほど、長い間の罪過の苦痛から脱却して行かれるばかりでなく、あれほど身を羞ぢた一生の失敗をも、我と我身を殺さうとまでした不徳をも、どうやらそれを全く別の意味のものに變へることが出来るやうな、その人生の不思議に行つて衝當つた。……（略）……未だ自分は愛することが出来る。さう考へた時は、彼はある深い喜びと驚きとに打たれた。……（略）……

新しい愛の世界が岸本の前に展げかゝつて來た。恥ぢても恥ぢても恥ぢ足りないやうに思つた道ならぬ關係の底からは是だけの誠實が汲めるといふことは、岸本の精神に勇氣をそゝぎ入れた。そこから彼は今迄知らなかつたやうな力を擲んだ。」（註18）

節子の手紙の部分は第二巻の五十四章である。ここから六十章まで岸本の心の充実感が語られている。節子の父であり、岸本の兄である義雄を親として見るような気持にさえなる。節子ひとりの写真をとらせ自分の手元におき、また縁談話を断りもする。そこにはむろん、生き生きした節子も登場する。訪れた冬はパリの空のような暗雲垂れこめた冬ではない。青い空が広がる明るい冬だった。帰国直前に考えた「幼き心に戻ること」、まさしく今はこの状態にあつて、自らの心に素直に従い、節子をひたすら思うのである。

「一月ばかりも、寢食を忘れて、まるで茫然自失の状態にあつた岸本は、人がこの自分を見たら何と思ふであらうと気がつくやうに成つた。彼は一月も眠らなかつたその自分に驚いた。若々しい血潮のためには胸も騒ぎ心も狂ふばかりであつた彼の青年時代ですら、眠られない夜が七日以上に續いたことは無かつた。もし彼が二十年若かつたら、是程の精神の激動を耐へる力はなかつたらうとも想つて見た。終には、彼は

自分で自分の情熱を可恐しく思ふやうに成つた。『これは荒びたパッションだ。静かな愛の光を浴びたものとは違ふ——どうかして早く斯様なところを通越してしまひたい——とても斯様なことでは駄目だ。』

と獨りで言つて見て、ボンヤリとした自分を勵まさうとした。（註19）

愛の獲得である。若き日に出会つた勝子と結ばれなかつた時点から保たれてきた「信のない心」はここに至つて払拭された。パリでアベラールとエロイズの寝像から知り得た信頼は、今や節子との關係の復活で実感となり得たのである。

「幼き心に戻ること」、それは、陳腐な言葉になるが、邪心のない状態である。人を疑うことを知らない、そして偏見を持たず、予断に落ち入らずに誠実なる眼で見ることである。さらに他人がどう見るかにこだわらないというより、無頓着である状態と言えよう。信を得ることは他者との關係で相互に認めあう点にある。まさしく自己の存在が他人の心によつて、つまり相手が居なければ生きることができない存在として確かめられているのである。人間の最も基本的な部分での、例えば、男女間で互いに認めあい、さらに愛情が伴つてこそ初めて自己の存在が相手にとって価値ありとなる。それは、また生きる力となり得るものである。

このような岸本の心の動きを描きだした作者藤村は、自らをモデルにして、作者もまた苦しみを乗り越え、同じ状態に達したとしてよいだろう。だからこそ作品化できたのであるが、この点に関わつていきたい。

【-1-(3)】

岸本自らが「パッション」と呼ぶほどの愛を得た後に、彼に訪れたのは渡仏以前のような右往左往した状態ではなかつた。静かに見つめるべき対象は帰国以来の自分達の姿であつた。

「岸本は自分の部屋を見廻した。聲が來て獨り仕事に親しまうとする彼を試みようとした。その聲は大きな打消の聲といふでもなく、寧ろ細々とした小さな耳の底にさゝやくやうな聲では

あつたけれども、その小さな聲に幻滅的な心持は誘はれるものがあつた。その聲は彼に訊いた。學問や藝術と女の愛とが兩立するものだらうか。歸國以來再會した節子と彼との間に起つて来たことも結局互いの誘惑ではなかつたか。二人の結びつきは要するに三年孤獨の境涯に置かれた互の性の饑に過ぎなかつたのではないか。愛の舞臺に登つて馬鹿らしい役割を演ずるのは何時でも男だ、男は常に與へる、世には與へらるゝことばかりを知つて、全く與へることを知らないやうな女すらある、それほど女の冷靜で居られるのに比べたら男の焦りに焦るのを腹立たしくは考へないかと。斯うした聲から誘はれる心持は、節子のためと考へて居る一切の重荷や、眼に見えない迫害の力のために踏みにじらるゝことや、耐へに耐へて居る心の痛憤や、それらのものをどうかすると堪へがたく果敢なく味気なく思はせた。」 (註20)

とは言え、岸本には心の落ち着きが続く。

作者藤村は、節子に冗談を言わせながらも、岸本にフランス旅行記を書かせる。この第二巻の第七十一章である「『野蠻人は必要によって動く…』」と引用が始まるこの一文はこの章の九割を占めている。これは大正6年4月1日付けの「中央公論」誌に掲載された『海へ』の一部である。旅立ちの心境を語った部分で、この引用文に導かれて旅の途上の船旅の様子が記録されている。この年の11月までに渡仏に関する回想記の数点を藤村は雑誌に寄稿している。その後連載を中断していた『桜の実の熟する時』を、「文章世界」の十一月号で再開し、翌大正7年6月に完成させる。

ここで注目しておきたいのは『桜の実の熟する時』の連載開始後の四回目、つまり「文章世界」の二月号で、第九章にあたる部分である。この章の後半に「戀愛は人生の祕鑰なり……」で始まる引用文がある。主人公捨吉が年上の女性繁子にもう会うまいと決意した後に、あたかも『新生』の岸本が女性に復讐するかと同じような心持の状態の時に、この文章を眼にしたのである。この引用文は、明治25年(1928)に発行された「女學雜誌」303号(2月6日付け)と305号(2月20日付け)に分載された透谷の『壓世詩家と女性』と題され

た文章からのものである。藤村が引用した部分は、北村透谷の言わんとするところに背いてはいない。この引用された部分を辿ってみる。先ず戀愛を礼賛する部分である。

「戀愛は人生の祕鑰なり、戀愛ありて後、人世あり。戀愛を抜き去りたらむには人生何の色味かあらむ、然るに最も多く人世を觀じ、最も多く人世の祕奧を究むるといふ詩人なる怪物の最も多く戀愛に罪業を作るは、抑も如何なる理ぞ。

……略……

戀愛を有せざる者は春來ぬ間の樹立の如く、何となく物寂しき位置に立つ者なり、而して各人各個の人生の奧義の一端に入るを得るは戀愛の時期を通過しての後なるべし。夫れ戀愛は透明にして美の眞を貫く。戀愛あらざる内は、社會は一個の他人なるが如くに頓着あらず、戀愛ある後は物のあはれ、風物の光景、何となく假を去つて實に就き、隣家より吾家に移るが如く覺ゆるなれ。」 (註21)

次に壓世詩家の壓世詩家たる由縁の部分である。

「抑も人間の生涯に思想なる者の發芽し來るより、善美を希うて醜惡を忌むは自然の理なり。而して世に熟せず、世の奧に貫かぬ心には、人生の不調子、不都合を見初める時に、初理想の甚だ齟齬せるを感じ、想世界の風物何となく人を慘憺たらしむ。知識と經驗とが相敵視し、妄想と實想とが相争闘する少年の頃に、浮世を怪訝し厭嫌するの情起り易きは至當の者なりと言ふべし。人生まれながらにして義務を知る者ならず、人生まれながらに徳義を知る者ならず、義務も徳義も雙對的のものにして、社會を透視したる後、『己れ』を明見したる後に始めて知り得べきものにして、義務徳義を辨ぜざる純樸なる少年の思想が始めて複雑解し難き社會の祕奧に接したる時に、誰か能く壓世思想を胎生せざるを得んや。」 (註22)

ここで若干補っておきたい。透谷の言う「想世界」と「實世界」である。前者は無邪氣の世界、いわば実社会にまみれていない子供達の精神世界

であり、後者は文字どおり現実の世界である。そして「想世界」と「實世界」の争いの中において恋愛はこの「想世界の敗將をして立籠らしむる牙城」(註23)と透谷はしている。

藤村が最後に引用する部分は、厭世詩人達が恋愛に振り回されながらも、彼らの心を理解し得る部分である。

「抑も戀愛の始めは自らの意匠を愛するものにして、^{あひて}對手なる女性は假物なれば、好しや其愛情ますます發達すると、遂には狂愛より静愛に移るの時期あるべし。この静愛なるものは厭世詩家に取て一の重荷なるが如くになりて、合歡の情あるひは中折するに至るは^あ豈に惜しむ可きあまりならずや。バイロンが英國を去る時の詠歌の中に『誰か情婦又は正妻のかちごとや空涙^{そらなみだ}を眞事^{まこと}として受くる愚を學ばむ』と言出でけむ、實に厭世家の心事を暴露せるものなるべし。同じ作家の『婦人に寄語す』と題する一篇を讀まば、英國の如き兩性の間柄嚴格なる國に於いてすら、斯くの如き放言を吐きし詩家の胸奥を^{うかが}視ふに足るべきなり。嗚呼不幸なるは女性かな。厭世詩家の前に優美高尚を代表すると同時に、^{しうま}醜穢なる俗界の通辨となりて其嘲罵するところとなり、其冷遇するところとなり、終生涙を飲んで寝ての夢覺めての夢に郎を思ひ郎を恨んで、遂にその愁殺するところとなるぞうたてけれ。戀人の破綻して相別れたるは雙方に永久の冬夜を賦與したるが如しとバイロンは自白せり。」(註24)

作者藤村が『桜の実の熟する時』で主人公捨吉にこれを讀ませたのは、繁子にもう会うまいとしてからである。詩人が「想世界」に、恋愛をその「牙城」と見なしてとどまる。だがそこに入り込んで来る女性は、美の象徴でありながら、実は「實世界」の象徴である。だからこそ詩人達は、振り回され、逆に女性を「嘲罵」し「冷遇」するのである。つまり捨吉を詩人として認識せしめるためである。自らを慰さめるためと理解した方が自然である。

再び繰り返すが、藤村が『桜の実の熟する時』の連載を再開した時期は、すでにこま子との関係

に対して、以前のような罪の意識が薄れた落ち着いた時期なのである。先の透谷からの引用文で言うならば「狂愛の時期」を経て「静愛」の状態ということになる。だが、透谷の言う重荷とはなっていないにせよ、藤村は自分達の間を見つめる。そして浮かび上がってきた疑問を『新生』に著わす。先に引用したが「學問や藝術と女の愛とが兩立するものだろうか」という命題である。透谷のこの文章を、『桜の実の熟する時』の若き主人公捨吉をして、先に述べたように理解せしめた。だが今や相思相愛の、恋愛状態の極致にある藤村は先に述べた命題に引きづられて、姪こま子を見たのであろうか。藤村の実生活ではその真偽は不明であるが、『新生』では次のように書かれている。

「同族の關係なぞは最早この世の符牒であるかのやうに見えて来た。残るものは唯、人と人との眞實がある許りのやうになつて来た。」

(註25)

叔父と姪、と言うより、人と人、男と女の間である。従って、この時期の藤村は透谷の文章にある「戀愛ある後は物のあはれ、風物の光景、何となく假を去つて實に就き、隣家より吾家に移るが如く覺ゆるなれ」という状態であろう。とすると、この透谷の文章の意味するところを初めて体験的に理解したと言えまいか。何故ならば、たとえ亡くなった妻フユと結婚したとは言え、『家』の中で描かれたように完全に信頼しきれない状態にあったから。つまり、透谷の言う「戀愛あらざる内」にあったから。

確かに透谷の言うとおりの、人生において青年期に至るまで、人は、幼き頃には「實世界」と「想世界」の区別なしに生きている。あたかも人形に語りかけるがごとく、現実世界のものとの交流がある。幼きものにとっては、まさしく「想世界」が現実である。だがそれも、言わゆる「ものごころがついた」時に崩れ始める。言わば理屈で「實世界」を捉えることが可能になったからである。世の全てが合理性に満ちていることを認識するのである。今度はこの合理性に基づいて、自らの「想世界」を「實世界」と比較したらどうなるか。例

えば、人を人と思ひ、人を信頼し、世の醜悪さを、不正を正すべきとするであろう。青年特有の敏感さで造りあげた世界、言わば「書生論」で描き出された「想世界」は、「實世界」の前には敗れ去る他はない。かくして青年達は大人の世界にまぎれ込み、「實世界」に身も心も浸しながら生活を始める。

現実の重みはかくも容易に「想世界」を落城せしめるのだが、時に、「敗將」の中には抗らう者もいる。北村透谷がこの「敗將」の「立籠らしむる牙城」が恋愛だとする点は先に引用したとおりである。そして透谷が、さらに指摘する点は、「牙城」にあって、つまり恋愛を成就した結婚生活で女性に振り回されてしまうことである。恋愛が、人生に妙味を味あわせるためにも、世のものごとを見つめさせるためにも、必要不可欠でありながら「想世界」がずたずたになってしまう。矛盾である。事実、透谷は「牙城」に籠りはするが、突き崩されてしまっている。透谷が「嗚呼不幸なるは女性かな。厭世詩家の前に優美高尚を代表すると同時に、醜穢なる俗界の通辨となりて其嘲罵するところとなり、其冷遇するところ」としている限り、振り回された状態が続くであろう。

ところが藤村は、姪こま子と起居を共にしていない。現実的な触れ合いは日常茶飯事ではない。夫婦としての生活は許されない状態にある。いきおい、互いの存在はそれぞれの「想世界」にあって重きをなしている。まして藤村は過去のいきさつから女性不信に陥っていたのが、こま子との関係から女性を信頼する心を得ている。若くして結婚した透谷との違いはここにある。透谷が「牙城」に籠りはすれども、落城してしまうのは先の矛盾が故ではあるまいか。藤村には「どうにかして生きたい」とする気持がある故に「牙城」を保ち続けることが可能だったのである。

姪こま子との関係を経た今、透谷の言わんとするところとは異なった位置にいる。「想世界」「實世界」という規定の仕方に関わりなく、人間の真実たる部分、人と人との信頼に結ばれた位置にいるのである。

『新生』に戻ろう。節子のうたがある。

「君もなく我が身もなくて魂二つ静かにはるの

ひかりのなかに」

(註26)

節子の心を迎ふ必要はあるまい。まさしく二人共に、このうたの状態にあるから。

しかし、岸本には心苦しさがなお続いた。

「彼は不幸な犠牲者が自分と同じ牢屋の中にあるのを發見した。彼が笑つたことの無い節子の心からの笑顔を見た日は、すくなくも明るいところへ出て來たと思つた二度目の時であつた。けれども彼の言ふこと爲すこと考へることは過去の行爲に束縛せられて、何時でも最後には暗い祕密に行つて衝き當つた。彼は過去の罪過を償はうが爲に苦しんでも、自分の虚偽を取除かうが爲には今迄何事も努めなかつたことに氣がついた。暗い祕密を隠さう隠さうとしたことは自分のためばかりでなく、一つは節子のためであると考へたのも、それは互に心を許さない以前に言へることであつて、今となつては反つてそれを隠さないことが彼女のためにも眞の進路を開き與へることだと考へるやうに成つた。」

(註27)

「想世界」の中のこととして閉じ込めておくのは誤ちとしている。「實世界」にこゝとを開陳して、つまり世に問うことが自分達の進む方向としたのである。ここには懺悔とする気持はない。すでに記したように「實世界」と「想世界」とを対立的に捉えてはいない。何故なら、「實世界」からの攻撃を受けるにしても耐えられるであろうし、否、対立的に捉えている限りでは城は保ち得ないかもしれないから。むしろバリで考へた「幼きものの心」に立ち戻ろうとするのは、「想世界」に立ち戻ろうとするのではなく、偏見や予見に捉われずに人に信をおくという、人の心のあり方としての基本的な部分を得ることであつた。それを保持しながら、現実の重みに耐えようとしているのである。

人の世との関わりあいを、バリでの体験を通じて必要としながらも、今や姪との関係の中で、自らの心の位置を、とりあえず確認したが故に、眞の意味での心の落ち着きを得たのである。

II-2

藤村は岸本の心の状態を描き出す。

「『一切を皆の前に白状したら。』

岸本は今まで聞いたことの無い聲を自分の耳の底で聞きつけた。もし嘘でかためた自分の生活を根から覆し、暗いところにある自分の苦しい心を明るく持出して、好い事も悪い事も何もかも公衆の前に白状して、これが自分だ、捨吉だ、と言ふことが出来たなら。」（註28）

このように一方で告白することを思いつきながらも、逆方向にも心は揺れる。

「『嘘でかためたにしろ、何にしろ、あれほど義雄さんに強ひるやうにして頼んで置いて、今更そんなことが出来るものだろうか。』

さう思ふと彼は躊躇しない譯にはいかなかつた。自己の破壊にも等しい懺悔——彼は懺悔といふ言葉の意味が果して斯ういふ場合に宛嵌まるか奈何かとは思つたが——その結果が自分に及ぼす影響の恐ろしさを思ふと、猶更躊躇しない譯にはいかなかつた。」（註29）

この「恐ろしさ」を読者はどこまで想像し得るか。自らの存在そのものを否定せざるを得ないかもしれない。だがそれにしてもこの「恐ろしさ」を乗り越える力の源泉はどこにあったか。

「『あの事』を書いたら。そんなことは以前の彼には考えられもしなかつたのみか、成るべく『あの事』には觸れまいとして節子から来た手紙は焼捨てるとか引き裂いて捨てるとかした以前の彼の眼から見たら、まるで狂気の沙汰であつた。斯様なところへ岸本を導いたものは節子に対する深い愛情だ。」（註30）

たとえ、姪との関係が糾弾されようとも、「深い愛情」に裏打ちされた心の状態にあるが故に、告白せんとする思いを支えるのである。まして、これまで見てきたように、単なる肉欲に溺れての日々の生活ではない。自らの官能に基づく欲望に忠実たらんとするのでなく、人と人との触れ合い

がゆえに生じた愛情に忠実たらんとしている。岸本にとって、この好ましい状態、人の真実たる部分に触れたがために隠すことは自然ではないとする。むしろ、人に誇るべき筋あいのものではないからこそ「恐ろしさ」とするのであるが。

「今まで射したことの無い光が斯様な風に岸本の精神の内部へ射して来たばかりでなく、歸國の日以來兎角疲労し易かつた彼の身體までが漸くその頃に成つて回復の時に向つて来た。寒暑、乾濕、風雨、霜雪、日光の度を異にした遠い異郷の方から歸つて来て、本當に自分の身體に成れたと思ふまでには彼は一年の餘も要つた。

新しい秋の空気は既に部屋の内まで通つて来て居た。彼は漸く故國に歸り着くことが出来たかのやうな心でもつて、葉と葉の奥に日の映つた庭の見える縁先へ行つた。熱い、寂しい感じのする百日紅の花なぞもさかりに咲く時であつた。その花の色までが妙に彼の眼にしみた。そして自分の國の方のものらしい親しみを感ぜさせた。」（註31）

岸本の心の落ち着きは、ここに引用したように自然をもゆったりと見させることにもなつた。節子を見る眼もおだやかで慈愛に満ちている。

「岸本はその心で節子を見た。何時の間にか彼女の生命も、あだかも香氣を放つ果實のやうに熟して来て居た。彼はその見違へるほど生々とした表情を彼女の外貌のどの部分にも見て取ることが出来た。彼女の濃くなつた髪の毛にも、彼女の牙え牙えした眸にも。あの歸國當時の義雄兄の言草ではないが、『片輪の一人ぐらゐ』とまで周囲のものから見られるほど衰へ果てた人を、兎も角もそこまで生かすことが出来たその人の知らない骨折を思ふと、彼はいくらか自分で慰さめるに足るやうな氣がした。」

（註32）

すでに記したように節子は常に岸本と一緒に居るわけではない。時々、訪れた節子に会うだけである。この『新生』には情熱のほとぼり出るやうな逢瀬は描かれてはいない。離れていた男女が、大急ぎで愛情を確認するかのやうな肉体をぶつけ

あう場面はない。あくまでも静かで、むしろ何十年も連れ添った老夫婦のごときたずまいである。

「どうかすると節子は彼の見て居る前で、帯の間から櫛なぞを取出して、彼女の額に垂下る髪をときつけたり、束ねた髪のかちを直したりするほどの親しみを見せる。彼はその濃い光澤のある髪を見た眼を直ぐ書籍の上に移すことも出来、その女らしいしなやかな表情を側に置いて自分の仕事を十分に思考することも出来るやうに成つた。」 (註33)

傍に節子が居ても熟考を要する仕事が可能となるまでの状態になったのである。節子との関係が復活し、透谷の言う「狂愛」の時期の悩みは姿を現わさない。

「學問や藝術と男女の愛とは果して一致するものだらうかといふやうな疑ひに苦しむ必要も漸く無くなつて來た。」 (註34)

ここで言う「男女の愛」とは、岸本と節子が共に抱くようになった信頼で裏打ちされた二人の心の状態であることは、論を待つ必要はない。學問や藝術は別の言葉で言うならば、抽象の世界である。その世界にありながら、現実の世界との関わりあいを拒絶しないのもまた學問や藝術であろう。社会や自然、そして人間を深く認識させるものがそれらである。しかるに愛あるが故に落ち着きを得た心は自然を容易に賛美する。何も自然ばかりではなく、社会までをもゆとりある眼で見つめることを可能にする。透谷の言う「戀愛ある後は物のあはれ、風物の光景、何となく假を去つて實に就」く状態である。かたわらに節子が居ても、かつてのような罪意識に捉われることなく、節子によってかき乱されることもない。むしろ素晴らしいものとして捉えていると言ってもよい。若き日の勝子との関係では望み得なかつた状態であり、妻園子との結婚生活では疑心暗鬼に捉われ、妻の死までの十二年の間にいっこうに訪れなかつた状態である。つまり岸本にとって初めて訪れた安堵感であろう。

近親相姦が世に知られば、祝福されるどころ

か、抹殺を免れえない。だがそれも承知の上での告白である。単にものかきとしての題材不足のために取り上げたのではあるまい。この時代、ともすれば、男女の間の愛情が世の暗部に追いやられ、家と家が縁を結ぶことが優先していた点を考えて見れば、岸本、ひいては作者藤村が知り、手にした男女間の愛情は珠玉の宝石であつたのではあるまいか。

まして、当時においては男女間の愛情が描かれている小説の多くは、性そのものが露骨に描かれていなくても、そこに比重がかけられている。家制度などによって抑圧された男女関係や性が真向から取り上げられたことによって、効果あつたことは事実である。それは藤村が描きたかつたものでもない。罪なる失態を経た、姪も岸本も生きたいとするから、救われたいとしたのである。そしてこの手にいれたものを純粋な愛とは表現せずに、むしろ知性ある人間的な愛を獲得したと言いたい。それ故に、ここに至って岸本は告白として世に披露することを決意したのである。

「一度岸本の心に轉機が萌してからは、眼前にある平和も、かりそめの安逸も、自分に取つて體裁の好く都合の好いやうなことも、結局それを如何することも出来なかつた。一方に彼を引留めようとするものがあればあるほど、彼が心に聞きつけた聲はますますはつきりして來るばかりであつた。」 (註35)

そして節子に告げる。

「煤けて暗かつたのを白く張替えてからは、急に明るくなつた。岸本はその初冬らしい親しみを増した障子の側で、懺悔を書かうと思ふといふ話を節子に聞かせて、彼女の承諾を求めようとした。その日まで隠しに隠して來た二人の祕密を曝け出してしまはうといふことは、岸本の方で思つたほど節子を驚かしもしなかつた。のみならず、彼女は例の率直な調子で、岸本の思ひ立ちに同意をあらはした。「黙つて置きさへすれば、もう知れずに済むことなんですけれど——」と節子は言つた。「わたしにお嬢に來て呉れなんて頼いことを言ふ人も無くなつて、却つて好いかも知れません。」

岸本は節子の顔を眺めたまゝ、しばらく言葉も無かつた。

『お前のやうに直ぐさういふ風いけないに持つて行つてしまふから不可——俺はさう眼前めのことばかりも考へては居ない。』

と岸本は言つて見た。もし彼が旅から歸つて来て節子を愛するといふ心を起さなかつたら、あるひはこゝまで眼がさめるといふことも無いかも知れなかつた。その心から、彼は言葉を繼いで、

『俺は自分の子供が大きくなつたら讀んで貰ふつもりサ。下手に隠すまいと思つて來たね。阿爺おぢは斯ういふ人間だつたかと、ほんたうに自分の子供にも知つて貰ひたいと思つて來たね…』
(註36)

岸本はこんな具合に気軽に口にするが、その影響を考えると逡巡は続く。病床にある節子の母、つまり嫂に手紙を書くが讀んでもらえない。

「嫂に宛てた手紙を書いた事は、この岸本から實際の動きを引出した。漸く彼は自分の意志から進むことが出来さうに成つて來た。彼は種々な方面から自分の身に集まつて來る嘲笑を豫期した。非難を豫期した。場合によつては、社會的に葬らるゝであらうことといふことも豫期した。その結果として、多年彼の携はつて居た學藝の世界から退かなければ成らないやうなことをも——

恐ろしく悲しい嵐の記憶がひしひしと岸本の胸に迫つて來るやうに成つた。……(略)……一度は自殺の瀬戸際にまで彼を追ひやつたのも、節子の顔にあらはれて來たあの恐ろしい『死』の力だ。遠い旅に出て、彼女を破滅から救ひ、同時に自分をも救はうとするやうなことが、そこから起つて來た。兄を欺き、嫂を欺き、親戚を欺き、友人を欺き、世間をも欺いて、洋行の假面にかこつけて國から逃出すやうなことも、そこから起つて來た。節子と自分との關係を明かにするには先ずその出發點からブチマケて掛らねば成らなかつた。岸本は暗いところにある自分の恥を明るみへ持出さうとする時に成つて、復た復た非常に躊躇した。
(註37)

嫂の死後、岸本は世に全てを語るために語り始めたのである。次兄義雄から義絶を言いわたされながらも、稿を書き進めば、それだけ彼には自分の世界が開けてくる。

「岸本が待受けた夜明は、何もさう遠いところから白んで來るでもなく、自分の直ぐ足許から開けて行きさうに見えた。血から解き放され、肉から解き放されて行くことを感知する度に、暗かつた彼の心も次第に明るい方へ、明るい方へと出て行く思ひをした。」
(註38)

これまで触れてこなかつたが、岸本がここに記した「血」の問題である。節子との關係を兄に詫びてあるとは言へ、岸本自身に負い目があるのは当然である。例えば、フランスからの帰国直後に兄から「書付」を参考までにとして渡される。そして一人になって嘆息する。

「矢張やっぱし、金の問題が附いて廻る——どうも仕方がない。」
(註39)

こればかりではなく、兄家族達と別居する際にも、岸本は移転費用と当面の生活費も手渡した。この他にも兄義雄からの金の依頼が何回かあったことがうかがわれる。この「血」からの解放とは兄家族に提供する經濟的負担からの解放として良いだろう。そして「肉」からの解放であるが、これを節子との關係を精算したと表現するなら、これまでわれわれが見てきたことが無駄に終つてしまい、作者藤村の意図した点から外れてしまうことが理解できよう。

一方、節子は岸本と似たような心の有り様を手に入れたのかどうか。父親たる義雄が、娘節子の行動を拘束したところで、また別れさせようとしたところで心の中まで踏みこむことはできない。節子が父から畜生呼ばわりされても、抗弁するのだが父には伝わらない。すると節子は手紙の形で父につきつける。その内容に触れてみる。

「先づ申上げたきは親子の間に候。親の命に服従せざるごときは人間ならずとは仰せられ候へども、そは餘りに親權の過大視には候はずや。

……何事も唯々諾々としてその命に従ひ、あるひは又、内部に反感等を抱きながら表面には唯これに従ふごときは、わが望むところにこれなく候。生命ある眞の服従こそわが常の願ひに候。思想の縣隔に加へて、平生の寡言のため、これらを云ひ出さざる機会もなく今日に至りしものあり候。

——自己の過ちを悔いも新ためもせで、^{ふたび}二度これを繼續するがごときは禽獸の行為なりと仰せられ候。まことに刻々として移り行く内部の變化を顧みることなく、唯外觀によりてのみ判断する時は、あるひは世の痴婦にも劣るものとおぼさざるべく候。……(略)……孤獨によりて開かれたるわが心の眼は餘りに多き世の中の虚偽を見、何の疑ふところもなくその中に平然として生息する人人を見、耳には空虚なる響きを聞きて、かゝるものを厭ふの念は更に芭蕉の心を樂しみ、西行の心を樂しむの心を深く致し候。わが常に求むる眞實を過ちの對象に見出したるは、一面より言へば不幸なるがごとくなれど、必ずしも然らず、過ちを變じて光あるものとなすべき向上の努力こそわが切なる願ひに候。』

(註40)

岸本以上に成長した姿が浮んでくるようだ。節子は生きる力を得たのである。台湾へ岸本の長兄と共に節子は行ってしまふのだが、岸本と共に生活せずとも生きられるのである。二人共に信頼に基づいた愛あるが故に。(以下次号)

註

1) 『藤村全集第七卷』 筑摩書房、昭和53年、P.499～500(以下『新生』を含む『藤村全集第七卷』をテキストとした引用は、ページを記すのみにとどめる。)

2) P. 248

3) P. 267

4) P. 268

5) P. 274

6) P. 293

7) P. 294～295

8) P. 301

9) P. 303

10) P. 307

11) P. 308

12) P. 309

13) P. 312

14) P. 313

15) P. 324

16) P. 332～333

17) P. 333

18) P. 335～341

19) P. 343～344

20) P. 355～356

21) 『藤村全集第五卷』 筑摩書房、昭和53年、P.532

22) 同書、P. 533

23) 『現代文學全集4 北村透谷・樋口一葉集』

筑摩書房、昭和31年、P. 66

24) 『藤村全集第五卷』 筑摩書房、昭和53年、P.534

25) P. 369

26) P. 377

27) P. 402

28) P. 402

29) P. 402～403

30) P. 403

31) P. 404

32) P. 405～406

33) P. 420

34) P. 420

35) P. 421

36) P. 422

37) P. 434

38) P. 464

39) P. 280

40) P. 456